

書評 森田雄三郎 『現代神学はどこへ行くか』(教文館、二〇〇五年、三五〇頁)

芦名定道

故森田雄三郎氏は、過去数十年の間、日本のキリスト教思想をリードしてきた研究者の一人であり、その学識は近現代のキリスト教神学から哲学全般、そしてユダヤ教まで広範に及び、とくに現代キリスト教思想の全体的な動向についての卓越した洞察において知られている。本書には、『キリスト教の近代性』(創文社 一九七二年)以降に発表された論文が収録されており、七〇年代以降の森田のキリスト教研究の全体像を知ることができる。収録された論文は、いずれも凝縮された内容であり、その詳細を限られた紙幅の中で紹介することは困難である。そこで以下においては、書評者の視点から諸論考全体の主要な議論の流れを再構成することによって、その思想的特徴を明らかにすることに努めたい。なお、本論文集の内容は次に記すとおりであるが、森田の三人の師(有賀鐵太郎、松村克己、武藤一雄)の著作についての解題と書評を収めた第四部の紹介は省略する。

目次

第一部 現代神学の概観と位置づけ……日本の神学はどこへ行く?(一九八〇)、現代神学の動向(一九八七)

第二部 神学基礎論とその展開

A 神学基礎論……キリスト論の視点(一九七八)、「史的」とは? キリスト論の前提(一九七九)、ハンス・キュンクの『教会論』の論理(一九七七)、論理経験主義への神学的展望(一九六八)、「客観的な意味理解」は可能か(一九七九)、解釈学的教義学の構成について エーベリンクのモデル(一九八二)、神学的構造主義の問題(一九八三)

B 展開……システム社会・宗教・実践(一九八四)、創造と進化 創造における無(一九九〇)、神の愚かさと人間の賢さ(一九九六)

第三部 ユダヤ教への視点……『ゾーハル』序説(一九八九)、罪をおかすことによって罪から救贖できる? ユダヤ神秘主義の失敗からの警告(一九九六)

第四部 解題・書評

一 森田の基本的視点と問題意識

「信仰がイデオロギーかユートピアかの二者択一のなかでしか理解されなくなるときには、信仰にかかわるすべてのことがらは、世俗化のなかでしか理解されなくなる。一九六〇年代後半以降の日本の教会と神学界は、この不幸な二者択一のなかに落ちこんでしまった」(9頁、以下頁数のみを表記)。

本書における森田の思索を特徴づけているのは、現代の歴史的状況においてキリスト教がいかなる現状にあり、またキリスト教神学はいかなる方向をみざすべきなのかという問題意識である。現代は世俗化と科学技術の時代であるが、同時にそれは、「核兵器の傘の問題から、経済システムの覇権争いと搾取、食糧不足、資源の枯渇、環境汚染の問題に至るまで、一挙に噴き出してきた諸問題」(35)が示すように、危機の時代と言わねばならない。この危機は、キリスト教神学においても、「信仰の主体的態度と自然科学の客観的方法」という「二元論的遊離もしくは分裂の危機」(11)として現実化しており、森田はここ

から現代を「無味乾燥な不毛な神学時代」(47)と診断し、一九六〇年代以降の日本の神学の動向を厳しく批判している。森田自身は、この神学の危機を乗り越える端緒を「言語現象に目を向けること」に見だし、神学的思考に相応しい論理の構築を旨とする。

二 森田の神学プログラム

森田が提出する以下の三つのテーゼは、『啓示としての神学』において提起されたパネンベルクの神学プログラムに匹敵する、日本における学的キリスト教神学の提唱と言えるものであり、それは、先行世代の神学者であるバルトやブルトマンたち、そして同世代の神学者たちを批判的に乗り越える大胆な試みに他ならない。

第一のテーゼ 「神の啓示は教会史を包括し、教会史は神の啓示を展開する」(12)。

第二のテーゼ 「神の啓示は信仰的実存の真理性を保証し、信仰的現実神の啓示を自己化する」(17)。

第三のテーゼ 「神の啓示は象徴的・創造的に教会史と信仰的実存の自己理解を包括し、教会史は神の啓示を展開し、信仰的実存は神の啓示を自己理解し自己化する」(20)。

森田の神学プログラムの詳細は、論文「日本の神学はどこへ行く？」をご覧頂くことにして、その要点のみを説明したい。これらのテーゼが意味するのは、キリスト教神学が「信仰的実存」(主体性)と「教会史」(社会行動と言語における客観的な構造分析という方法論の使用)という二つの契機を動的に統合するところに存立し、この動的統合は「神の啓示の象徴的・創造的作用」によって生み出される、ということである。「神の啓示は、教会史から客観的に企投される存在可能と、信仰的実存の自己化の可能性とを媒介し、両者の同一性を象徴的に将来へ向けて指示する」(18)。しかし、現代の危機の中で、キリスト教神学は「信仰」「教会」「啓示」の三つの契機の分裂あるいは短絡化に陥っており日本では、バルトやブルトマンの神学の皮相的で不消化な「受容」に基づく「神学的不毛」となって現れている、三つの契機をそれらの差異と矛盾を介した動的な相互浸透へともたらすことこそが、森田の神学プログラムの課題となる。

三 現代神学の全体像

森田は、「バルトやブルトマン、あるいはティリッヒやニーバーといったいわゆる大物が存在せず、まさに神学の戦国時代に突入した感」(32)のある「現代」において、自らの神学プログラムの具体化を試みるわけであるが、そのためには、現代神学の全体像を批判的に把握することが必要になる。それは、神学の動向と哲学の動向との相関関係に留意することによって行われ、論文「現代神学の動向」では、「六〇年代以後に現われた新しい神学的動向のうち有意義と思われるもの」(35)として、「解釈学としての神学」、「歴史の神学」、「希望の神学」、「プロセス神学」の四つが取り上げられる。以下、この四つの動向にしぼって、森田の議論を概観することにしたい。

1 解釈学としての神学

ブルトマン神学は、「『イエスを……客観的に記述するのか』、それとも『人間にとっての信仰に対する有意義性という面に関して語るのか』」(56)という現代のキリスト論の根本問題に関して、客観的な歴史的研究がケリュグマの背後に遡ることを否定し、信仰の「聴」としてのそのつどの決断を強調する。これに対して、ブルトマンの弟子たちは、「ブ

ルトマンが徹底的に排除した客観化的言表が、それにもかかわらず新約聖書の中で意味連関を持っていることを、指摘し」(36)、新たな「史的イエスの探求」を試みており、この点に、森田はその真理契機を認める。しかし、「ユンゲルと同様に、エーベリンクもまた、教会の社会的意味連関という現代の問題に対して積極的に答えない」(37)という欠点を抱えており、森田の評価は厳しい。ルトマン学派の神学は「個人道徳を超えない」、また「教会論の欠如と倫理の狭さ」(38)に弱点があり、「ルトマン派は、事実上、解体状態」にあり、「神学的解釈学の弱点を露呈」(222)してしまった。

2 歴史の神学（宗教学・宗教史の神学、科学論の神学）

パネンベルク（森田はパネンベルクと表記）においては、その初期の段階から、バルトやルトマンに対する批判的態度が明瞭であったが、その「意図と神学的動機は、『科学論と神学』（一九七七年）の出版によって、はじめて明瞭になった」(39)。森田は、論文「神学的構造主義の問題」でこのパネンベルク神学の展開を詳細に分析している。パネンベルク神学は、他の経験対象と共に指定される「意味総体性」への反省を通して神を間接的に論証する「神についての学」という立場から、「主張命題を素材として、対象たる神の意義連関と、神についての諸言明の首尾一貫した究極的意味連関とを探求する」(181)ものであり、現代神学の他の動向に比べ、科学哲学的な主知主義的な傾向を顕著に示している。それに従えば、神学的言明はあくまで仮説的であって、意味総体性も予測的な把握にとどまることとなる。そして、神学的探求はどこまでも完結することなき作業となる。これに関して、森田は、「直接的な宗教経験は、パネンベルクの神学的地平から脱落」しており、「このような神学的探求はなぜ一種の必然性をもって探求し続けることができるのだろうか。パネンベルクが最初に切断した直接経験の立場は、この神学的探求を支える隠れたエネルギーとして、最後の直接的自己啓示に至るまで、つねに隠れた重要なはたらきを行なっているのではないだろうか」(190)、「ただ探求し続けよとの倫理的要求のみが残る」だろうとの疑問を呈している。パネンベルクによる宗教史の神学が具体的で十分な内容を伴った仕方で未だ論文化されていない現段階では、「晩年のトレルチが苦闘したキリスト教的ヨーロッパのイデオロギーを一步も出ていない」(40)と言わざるを得ない。

3 希望の神学・革新の神学（解放の神学）

「エキュメニズム運動を通して現代の科学・技術時代の全地球的、人類的危機に直接に取り組もうとするだけに、現在を超えて将来へと目ざす彼の『エコロジーの神学』の議論には、確かに耳を傾けるに値する多くの洞察が含まれている」(218)とあるように、森田はルトマン神学に対して高い評価を行っている。また、ルトマンの「最初の三部作」が「なおプログラム提出にすぎず、本格的な方法論に基づいた神学的反省は『三一神と神の国』にはじまること」(41)を指摘し、「ごく最近のルトマンの神学的動向が、エコロジー的関心と、終末論的な社会行動理論とを、どのように総合するかが、彼を理解する上の一つの重要な焦点をなす」(42)と論じるなど、森田のルトマン論は包括的かつ的確である。

森田によれば、ルトマン神学の問題点はメシアニズム的な弁証法という論理構造の内に認められ、森田のルトマン批判は、「ルトマンの思想は、良い意味でも悪い意味でも『神学的』であって、宗教哲学的論理性に欠ける憾みがある」(221)という点に向けられている。しかし、こうした批判が意味するのは、ルトマン神学の否定ではなく、むしろ

るモルトマンを手掛かりに、「モルトマンを超えた宗教哲学」(221)が目指されているのである。この課題に取り組む際に、森田が注目するのは、八〇年代以降のモルトマンにおいて、中世のカバラ神秘主義の「『シェキナー』論と『ツィムツーム』論」(234)が積極的に取り上げられている点であり、これは、晩年の森田のユダヤ教論とも密接に関わっている。

4 プロセス神学

本書には、プロセス神学を詳細に扱った論文は収録されていないが、ホワイトヘッドの包括的な形而上学的体系に基づいて、「新しい技術社会の問題に対して、科学哲学と文明論に支えられたグローバルなパースペクティブを提供できた」(45)という点で、森田が、プロセス神学を高く評価していることは確認可能である。とくに、「二〇世紀の西洋哲学の中で、仏教思想との接点を提供できる哲学は、ハイデッガーとホワイトヘッドを置いて、他に見当たらない」(46)との見解は、興味深い。

四 ユダヤ教研究(本書第三部)

一九八七年の「現代神学の動向」あたりを境にして、晩年の森田は、ユダヤ思想へとその研究の方向を大きく転回してゆく。このユダヤ教研究は先に見たモルトマン論と関連しており、ここにさらに掘り下げて考えるべき問題が潜んでいると思われるが、ここでは、森田のカバラ論の内容を簡単に紹介するにとどめたい。第三部所収の論文では、古代から近代に至るユダヤ教史全般について言及されるものの、森田の主たる関心は、中世から近代にかけてのユダヤ教神秘思想(カバラ)に向けられている。「『ゾーハル』序説」では、十三世紀の『ゾーハル』(光輝の書。モーシェ・デ・レモンの書とされる)における「一〇のスフィロート論」を中心に、カバラが論じられ、また、「罪をおかすことによって罪から救贖できる?」では、ショーレムの研究を参照しつつ、シャブタイ・ツヴィー運動(十七世紀のメシア運動。メシアの背教という逆説)とその影響史が考察される。

森田のカバラ論の意図を理解する上で注目すべきは、森田の次の指摘である。「『神なきところに神を見る』ことが、ショーレムの神秘主義にも通じる本質であるとするれば、それとシャブタイ派のメシア運動の歴史解釈とは、どこかいつそう深い場所で触れあうところがあるのだろうか。じっさい、ショーレムが生涯の友として心をゆるした親友の一人が、ユダヤ人無神論者の文芸批評家W・ベンヤミンであり、無神論と神秘主義は紙一重であると語るからである」(297)。もし、森田がカバラ神秘主義の中に探究していたものが、「神なきところに神を見る」可能性であったとするならば、それは、「神なきところ」(世俗世界、無神論、ニヒリズム)にいかにか「神を見る」のか、という現代キリスト教神学の課題の核心に迫るものと言えないであろうか。アウシュビッツ、地下鉄サリン事件、阪神淡路大震災、9・11同時多発テロという神なき状況下においてなおも神を見る可能性は、日本のキリスト教思想にとっても重要な意味を有しているはずである。

一九八〇年代までのキリスト教思想のみごとな分析を経て、九〇年代以降、森田はその思索をユダヤ教研究へと転回してゆく。九〇年代以降の状況下でキリスト教思想に取り組む者としては、森田との近さと遠さ、一方での同時代的な問題意識と他方での状況の大きな相違を感じざるを得ない。しかし、晩年の森田が何を目ざしていたのかという問いは残るとしても、森田の研究成果　パネンベルクやモルトマンについての論考は現時点でも

最良のものである　　を正当にふまえつつ、キリスト教思想研究を前進させるという課題が、現代日本のキリスト教思想研究者に課せられていることは疑いないであろう。